第　IV　部

助動詞の語形変化と活用形

［第Ⅳ部で取り上げる問題について］

第Ⅰ部において動詞活用体系の変遷を論じた。そこで取り扱われた、終止形連体形合流や二段活用の一段化といった変化の事実、また、それらの変化の持つ意義については、基本的に動詞以外の全ての活用語にもあてはまることである。しかし、活用形としての音便形の持つ意義が動詞と形容詞とでは全く同じではないように（第Ⅱ部・第Ⅲ部）、動詞以外の活用語にはそれぞれの品詞独自の形態音韻論的問題が存在する。第Ⅳ部では助動詞の活用の歴史的変遷について論じ、助動詞において〈形態の示差性〉は如何なる形で実現されるかを明らかにする。

助動詞は、動詞と異なり、それぞれの助動詞の誕生以後、絶えざる辞化（助動詞化）の流れの中にあって、活用体系全体の変化と同時に形態の縮約への指向やそれぞれの機能変化（文法的意味の変化）をその形態の上に反映させていく。したがって、助動詞の活用を論ずるには、どうしても個々の助動詞の語史を踏まえた議論にならざるを得ない。歴史上の全ての助動詞の変遷を総括的に論ずるのは無理なので、本研究では中世を中心とした幾つかの助動詞の変遷の中に、そこに作用した助動詞特有の要因を浮かび上がらせる形で議論を展開する。

まず、一般の終止形連体形合流の形からは異例とも見られている助動詞「むず」の変遷を論じ（第９章）、その変遷の中に、〈辞化に伴う語形縮約〉と〈活用語尾の保存の欲求〉という相矛盾する二つの力が働いていることを論ずる。そして、それらの力が働いた結果、「むず」だけではなくその他の中世期の助動詞に、二つの形態の〈ゆれ〉が見られる実態を明らかにし（第10章・第11章）、或る活用形が他の活用形の形態変化を誘導する場合があることを論ずる（第12章）。

第９章　ムズ（ル）からウズ（ル）へ

［本章の要旨］

文献上に見られるムズ（ル）とウズ（ル）との間には用法上の断絶がある。書記言語としてのムズ（ル）は、中世前半期（13～14世紀頃）に幾つかの複合助動詞以外の用法を持たなくなっており、中世後半期（15～16世紀頃）の口語的文献（抄物・キリシタン資料・狂言など）に見られるウズ（ル）は、これら書記言語としてのムズ（ル）の直接の後身ではなく、（文献上に現われないという意味で）伏流した音声言語の形の、文献上への顕現と考えられる。

平安時代における助動詞としての誕生以降、音声言語では、ムズルの形が終止法・連体法ともに使われており、辞化による語形縮約の指向の中で、ムがンを経てウとなるにつれ、中世半ばまでに語尾ルを失い、終止法・連体法ともにウズの形が使われるようになった。これが抄物資料以後文献上に広く見られるようになる。ウズはその後中世末期に、活用語尾を保存したいという欲求が働き、語尾ルを復活させたウズルがウズと並んで用いられた。

［語の形態を表示する際の括弧の意味について］

本研究では議論の対象となる語の形態をカタカナで表示しているが、その際、本章以降では、（　）で表示されるものは、その括弧内の音節が付く形態と付かない形態の両方存在することを表すこととする。また、〈　〉で表示されるものは、その括弧の直前の音節とその括弧内の音節が交替する場合があることを表すこととする。例えば、ムズ（ル）は、ムズとムズル両形態をまとめて表し、ム〈ウ〉ズは、ムズとウズ両形態をまとめて表す、といった要領である。

なお、ムズ（ル）とンズ（ル）も基本的に区別すべきであるが、実際の用例として現れる場合（特に平仮名表記の「むず（る）」と「んず（る）」）はその差異が明確でない場合も多い。したがって、ムズ（ル）とンズ（ル）の区別が特に問題とならない場合は両形を合わせて単にムズ（ル）とのみ表示することとする。

第１節　はじめに－ムズ（ル）とウズ（ル）

推量の助動詞ウズ（ル）は、中世から近世にかけて終止法・連体法それぞれにウズとウズルの両語形の用例が見られ、しかも、時期的に異なる文献資料によって複雑な消長を示している。その両語形の消長の実態とそれに対する解釈については、夙に大塚1956, 1966, 山内1964（山内1989に再録）があり、これらの論考を出発点として最近に至るまで種々の視点から発言がなされている。

また、ウズ（ル）の前身ムズ（ル）についても、吉田1962a, bを始めとして諸家によってその成立や中古・中世の諸文献における用法が研究されている。

しかし、ム〈ウ〉ズ（ル）の諸形態が生まれる経緯を、通史として一貫した視点から論じた研究は少ない。また、ムズ（ル）とウズ（ル）の語としての同一性・連続性を単純に前提としているために、両形の違いが不明確であるケースも多い。本稿では、中世を通じて起こったムズ（ル）からウズ（ル）への転換を、文献上に現れる書記言語の形と文献上には現れない音声言語との距離を測ることに意を用いつつ観察し、その上で従来のウズ（ル）に関する所説のうち《キリシタン資料などにおける終止法ウズは、旧終止形の残存である》という考えに疑念を表明する。そして、自分なりに考えるムズ（ル）とウズ（ル）の諸形態の消長に対する解釈を述べてみたい。

第２節　辞化と語形縮約

さて、日本語における助動詞は、次に掲げる諸例(注1)に見られるように、基本的に、まず助動詞以外の品詞及びそれらの複合した形式が慣用化し、それらが補助用言化した後さらに熟合して助動詞となるという経過をたどるものが多い。

～テアリ＞タリ＞タ
～ニアリ＞ナリ
～マクホシ＞マホシ
～イタシ＞タシ＞タイ
～ニテアリ＞～デアル＞デア＞ヂャ・ダ
～ニテサウラウ＞～デサウ＞デスウ＞デス
～マヰラス＞マラスル＞マイスル＞マス
～テイル＞テル
～テオク＞トク
～テシマウ＞チャウ
～ヲミタヨウダ＞～ミタヨウダ
＞ミタイダ＞ミタイ

意味的にはもともと具体的・具象的な語彙的意味を持っていたものが、抽象化し文法機能を表すだけに変化していく。また、それに応じて形態的には語形が縮約していく。(注2)これが日本語における助動詞の基本的成立パターンと考えてよかろう。

本章で問題とするム〈ウ〉ズ（ル）も基本的にはこの助動詞化の流れの中にあるものと考える。ただし、中世後半期におけるウズとウズルの消長のように、そこに幾つかの固有の事情が働いて単純な「助動詞化＝語形の縮約」の経過をたどらなかったものであろう。まずウズ（ル）の前身のムズ（ル）の成立事情から見ていきたい。

第３節　～ムトスからムズ（ル）へ

平安時代におけるムズ（ル）については、次の『枕草子』の記事があまりに有名である。

なにごとを言ひても、「そのことさせんとす」「いはんとす」「なにとせんとす」といふ「と」文字を失ひて、ただ「いはむずる」「里へいでんずる」など言へば、やがていとわろし。まいて文に書いては言ふべきにもあらず。物語などこそ、あしう書きなしつれば、いふかひなく、作り人さへいとほしけれ。

（ふと心劣りとかするものは）

清少納言は～ムトスから「と」の脱落したものとしてムズルを正しからざる言い方と非難しているのであるが、山内1964が指摘し、最近では小松1999が詳しく論ずるように（同書Ⅱ－7）、正しい言い方を～ムトスという本来の終止形で挙げているのに対し、正しくない言い方をムズルと本来連体形の形で挙げていることに注意すべきであろう。清少納言を不快にさせた実際の音声言語での表現はムズルという連体終止の形であったことをうかがわせる。もし、音声言語においてムズという終止形が普通に使われていたならば、《「と」文字の脱落》を規範からの逸脱とする清少納言は、当然「いはむず」「里へいでんず」という形を示したことであろう。それが自然に「いはむずる」「里へいでんずる」の形になってしまうことは、当時の音声言語における実態（このような《新しい助動詞》に既に終止形連体形の合流が実現されていたこと）を反映していると考えられる。

そうしてみると、下に例を挙げるような、平安時代の物語等に散見する（吉田1962a ）終止形ムズは、音声言語における俗語形という語感を伴うムズルに対して、《本来の》終止形へと規範化された書記言語の形と考えられる。

・迎へに人々まうで来んず。（竹取物語）

・その人のもとへいなむずなりとて…（伊勢物語九六段）

・必ず死なんず。（大鏡巻二）

つまり、ムズルの本来の言い方は～ムトスだ、という（『枕草子』に見られるような）語源との結びつきの意識からすれば、ムズルの規範化は、～ムトスへの先祖帰りを起こせばよいはずである。しかし一方、意志・推量の助動詞としてムズル独自の意味（言い換えれば、～ムトスという客体的表現に解消しきれないモダリティ的意味）を保持しつつ、なおかつ、その俗語臭を消した書記言語での規範形として、本来のサ変終止形の形ムズが作り出されたのであろう。

これに対してムズルは終止法としても稀に次のように文献上の口語的文脈に現れ得たが、基本的に音声言語に使われる形として文献上の記録にあまり姿を残さない、伏流する形として存続した考えられる。

・ともし消ちなむずるとて…（伊勢物語三九段）

・遊びにせんずると言ふ。（宇津保物語　俊蔭）

しかし、ここで注意しておくべきことがある。上の『枕草子』の評言に見られるように、ムズは、書記言語においても他の推量の助動詞ム・ラム・ケム・ベシのようないわゆる文語文における正統的な助動詞として認められなかったことをおさえておくべきである。その端的な現れがムズが和歌には使われないことである。正統的な助動詞として認められない要因には、この助動詞が生まれる原形である～ムトス（>～ウトスル）の表現形式が最初から最後まで並行して存在していることが深く関わっていると思われる。テル・トク・チャウのような現代の助動詞が、～テイル・～テオク・～テシマウという原形の表現形式が併存しているために、いくら音声言語で汎用されていても、なお書記言語としては俗語的ニュアンスがつきまとうように、ム〈ウ〉ズ（ル）も～ム〈ウ〉トス（ル）との結びつ

きが意識される限り、俗語的ニュアンスを脱却できなかったに違いない。

第4節　ムズ（ル）からウズ（ル）へ

中世前半期の軍記物や説話集におけるムズ（ル）の用例を見ると、終止法ムズの用例はほぼ次の場合に限定される。

(a)ナムズ（完了の助動詞との複合助動詞の形）

・もし此の事もれぬるものならば、行綱まづ失はれなんず。（平家物語巻二西光被斬）

・ただ別れきこえなんずと思ひ給ふるが、いと心細く、…（宇治拾遺物語巻十ノ六）

(b)ムズラム（推量の助動詞との複合助動詞の形）

・末代いかがあらむずらむ。おぼつかなし。（平家物語巻一 殿上闇討）

・この稚児、定めておどろかさむずらんと待ちゐたるに、…（宇治拾遺物語巻一ノ十二）

つまり、終止形ムズといっても、上に挙げた二種の助動詞と複合せず自由に単独で文末に位置する次のような用例はあまり見られないのである。

・仰せくだしたらんずるに、やすう打つてまいらせんずとのたまひければ、…（平家物語巻六飛脚到来）

・いみじきわざかな、恥を見てんずと思へども、…（宇治拾遺物語巻二ノ九）〔ただし、この例も完了の助動詞との複合例ではある。〕

このような傾向は、平安時代からの傾向として次のように諸家によって指摘されている。

◇「むず」が単純で（原文ママ。「単独で」の意か？）終止せず下に推量の「らむ」を伴なう事は中古からの傾向ではあったが、近古に至ってそれが急激に増大したのが流目（原文ママ。「注目」の誤）される。（吉田1962b）

◇中古の終止形ムズについてまとめてみる。まず、多くはラムを下接し（中略）ラムを下接していない場合では、多く強意のヌの未然形ナを伴っていた。（漆谷1995）

中世前半期の文献資料における緻密な計量調査は上の漆谷1995や菅原1991等によってなされている。説話集や軍記物など11種の文献を計量調査した漆谷1995によると終止形ムズの全用例356例中341例（95.8%）がムズラムとナムズであり、『延慶本平家物語』を計量調査した菅原1991によれば、終止形ムズ203例の中単独で用いられているものはわずか4例、他はナムズ・ムズラム等（菅原はテムズも複合例に含めている）の複合して用いられる例であるという。(注3)

このことは、中世後半期の口語的文献に見られる終止法のウズが、それ以前の書記言語で複合助動詞化していた終止形ムズの残存と単純に呼べないことを意味する。抄物資料・キリシタン資料・狂言資料などにおいて、ウズラウがムズラムを引き継いでいるものの、ナムズの後身たるナウズは消え、前代に圧倒的に少数だった終止法ウズ単独で用いられる用法は全く自由に使われているのである。そもそもムズからウズへの語形変化には、ムズラム＞ウズラウは自然であっても、ナムズ＞ナウズの変化は、長音化してしまうことによっ

て完了の助動詞ナの形態が曖昧化してしまうために、音声言語でも抵抗があったのではないかと思われる。実際文献上でもナウズの形はほとんど見られない。山内1989では、ムズがウズとなる時期について補注が加えられており、その補注（p152）に、

「うず」は鎌倉時代の『諸事表白』に、ウズ・ウズル・ウズレの各形が見える。ウズルの連体形終止の例もウズ＋体言の例もないようである。

としたうえで、次の例が挙げられている。

・昔ノ佛ノ様ニ説話モセテヤハ涅槃ニ入ナウスルト思食煩ラウテ

この例は結びの連体形（ウズル形）であるものの、ナウズ（ル）の珍しい例と言えるのではないだろうか。(注4) しかも、それがムズ（ル）がウズ（ル）へ移り変わる極初期の文献に見られ、その後の文献に見られないことは、その形の使用が臨時的・過渡的なものであり、結局ム＞ン（撥音化）＞ウ（長音化）の過程で、ナムズの複合助動詞は、書記言語の上でも音声言語の上でも廃滅せざるを得なかったのであろう。

一方、本来連体形のムズルが、係結び以外に文末に位置する例は少ないながら見られる。この点は、前節で見た平安時代と共通している。これは、他の一般の活用語と軌を一にする終止連体形成立の表れでもあるが、注意すべきは、この場合ナムズルの複合助動詞の形に偏ることはなく、また、ムズルラムの形は見られないことである。

・この女の親の、易のうらの上手にて、この女のありさまをかんがへけるに、いま十年ありて、まづしくならむとす、その月日、易のうらなひする男来て、やどらむずるとかんがへて、…（宇治拾遺物語巻一ノ八）

以上のような事実と推測を踏まえ、筆者は、基本的に山内1964の考え方に沿って、以下のように考える。

室町時代の口語的文献資料に見えるウズ（ル）は、軍記物や説話集等前代の文献に見られる書記言語の直接の後身ではなく、平安時代から書記言語としては文献上にあまり現れないムズル（終止連体形）の直接の後身である。音声言語上のムズルはウズルに変わるとともに（その変化の起こった絶対的年代と順序は明らかでないが）語尾のルを失ってウズの形になっていたと推定するのである。こう推定することによって、抄物資料において、前代の書記言語の様相とは断絶したかたちで、終止法・連体法ともに自由にウズが現れることに説明がつくと考えるのである。

第５節　終止法ウズは〈旧終止形の残存〉か？－京1995に対する私見

前節で指摘した事から、通時的前後関係として《ウがムの後身である》と言うのと同じように《ウズはムズの後身である》とおおまかには言えても、《終止法ウズは終止法ムズの後身である》とは単純に言えないことがわかる。少なくとも《終止法ウズは終止法ムズの直接の後身である》とは言えない。したがってまた、《この期の文献資料に見られる終止法ウズは旧終止形の残存である》とも単純には言い難い。

京1995は、終止法ウズを旧終止形の残存であると主張した論文である。同論文は、キリシタン資料や狂言資料におけるウズが、ウズルに比べて《対句的表現の前項あるいは中止法》に用いられるという特徴を有することを指摘し、同時期のツ・ナリ・タリ・タシ・形容詞旧終止形（～シ）など、旧終止形が「連体形終止が一般化した後においても残存した」ものがあり、これらもまた《対句的表現の前項あるいは中止法》に用いられるという点から、両者を同様のものととらえ、ウズを旧終止形の残存と判定する。

しかし、京1995の下した、ウズとツ・ナリなどのグループとが同類であるという判断には、以下に述べるような幾つかの疑問を抱かざるを得ない。

まず第一に、《旧終止形の残存》と主張されるところの形がムズでなくウズであることである。ムズの形なら文語的ではあろうが、実際にキリシタン資料等に現われる形はウズである。ツ・ナリ・タリ・タシ・形容詞旧終止形（～シ）のようないわば《れっきとした》文語的旧終止形に対して、ウズは、あまり《れっきとした》旧終止形ではない。これは歴史的事実としても、また、室町時代の人々の言語感覚としてもそうであったであろう。ロドリゲス『日本大文典』第一巻「書きことばの活用」（38ウ～45オ・土井忠生訳本p157～p180）の項に数ヶ所にわたって登場するンズ（ル）・ウズ（ル）でも、《書きことば》としてはンズ（ル）、《話しことば》としてはウズ（ル）が使われている。両者の違いはン⇔ウの対立であり、～ズ⇔～ズルではないのである。

第二に、終止法ウズは《対句的表現の前項あるいは中止法》以外にも用いられていることを挙げることができる。ツ・ナリ・…のグループの旧終止形は、確かに《対句的表現の前項あるいは中止法》にほぼ限定されて用いられるが、(注5) 終止法ウズは、終止法ウズルと並んで《対句的表現の前項あるいは中止法》以外にも自由に用いられている（文体上も特別にその部分だけ文語的表現とは解釈できない）。これは既に山内1964で指摘されており、そのため山内1964では、「対句的表現の前項あるいは中止法に用いられる」というような断定的な表現ではなく、「ウズは発言の中途に多く用いられる。前文から後文へと対比し添加し展開する文脈の中に位置する」という慎重な言い方になっているのであろう。終止法ウズがツ・ナリ・…のグループと同類の語感を伴っていたとしたら、《対句的表現の前項あるいは中止法》以外の自由な文終止に用いられることはなかったであろう。

以上、終止法ウズが《対句的表現の前項あるいは中止法》に用いられる傾向があることはそれなりの事実として認められるとしても、ウズとツ・ナリなどのグループとが同類であると必ずしも言えないのではないかという疑問を挙げた。これに、山内1997で京1995に対する批判として既に述べられていることであるが、京1995の見解が抄物資料における終止法・連体法ともにウズ形という状況を考慮の外においたものであるという点を加えると、終止法ウズが《旧終止形の残存》であるとは言い難いと筆者は考える。京1995では、もともと終止法・連体法を共に持つウズル・ウに牽かれてウズも連体用法を持つようになったのではないかという予測が最後に示されているが、結論は課題として残されている。確かにキリシタン資料における終止法・連体法のウズルは、平安時代以来の連体終止法・連体

法ムズルを引き継ぐものと解釈すれば、それは、もっとも素直な解釈なのだが、そうすると抄物資料における終止法・連体法共にウズという状況を素直な時代順の解釈の中に位置付けられなくなる。その結果、抄物資料の状況かキリシタン資料の状況かどちらか（あるいは両方共）を音声言語の姿とは違った特殊な書記言語の状況とする解釈も生まれるわけである。筆者はこれに対して、音声言語と書記言語の乖離は平安～鎌倉時代にあり、抄物資料・キリシタン資料は共に口語的文献としてそれぞれの時代の音声言語の状況を反映しているものとして、前節末に記したように解釈したいと思うのである。　なお、キリシタン資料等におけるウズとウズルの意味・用法上の違いについては、一部上に引用した山内1964（山内1989に再録。同書p139）の記述を基本的に妥当なものとしたい。ウズとウズルの意味・用法上の違いについて筆者なりに考えるところもあるが、それは次章に述べる。

第６節　語尾ズの終助詞的性格－鎌倉1993に対する私見

終止法ウズが旧終止形の残存かどうかという問題の立て方は、当然ム〈ウ〉ズ（ル）の諸形態の基本的同一性を前提としているのだが、発表されている論考の中にはウズとウズルを全く別な語と解釈するものもある。鎌倉1993がそれで、同論文は、ムズ・ムズルの起源をムトスに求めず、ムズは〈意志推量の助動詞ム＋終助詞ゾの母音交替形ズ〉、ムズルは〈意志推量の助動詞ム＋四段活用動詞スル〉とする。なお、同論文は、ムズ・ンズ・ウズの違いは問題としていない。

鎌倉1993の主張は、基本的な方法に容認し難い点が存する。例えば、ムズを〈意志推量の助動詞ム＋終助詞ゾ〉のムゾと解釈しても「意味機能にそれ程の違いは感じられない云々」（p242）ということと、ウ列音とオ列音が交替する例が他にも見られるからズとゾも音交替の例と解釈できることの２点から、ムズを〈意志推量の助動詞ム＋終助詞ゾの母音交替形〉と主張するのだが、形態音韻論的考え方の基本として、ある意味的・文法的単位体が、形態上の変化を生み出し、なおかつ元の形態も共存し続けると解釈できる場合、そこには別の形態を必要とする何らかの事情（意味的・文法的機能分担）があったからこそ別な形態が生み出されたものと考える。言語が或る共時態内に〈無意味な差異〉を持つことは、単に言語の経済法則に反するだけでなく、言語伝達・言語習得上マイナスでしかないからである。しかし、鎌倉1993では、ムゾからムズが生み出され、両者が共存することによって室町時代の日本語にどのような《利益》がもたらされたのか説得力のある説明は示されていない。或る形態から或る形態へのいわゆる音交替や音転化が類例の存在を以て正当化されるならば、恐らくあらゆる恣意的な形態変化が説として成立するであろう。

鎌倉1993が示す個々の形態と用法の解釈について一々筆者の見解を示す余裕はないが、重要と思われる一例を挙げる。鎌倉1993の主張するようにウズがウゾの母音交替形で、ウズのズが終助詞ならば、次のような明らかに名詞を修飾している連体法ウズの例を文法的にどう解釈するか？同論文において納得のいく説明はない。(注6)

・外ニアロウス胡ハ在内（うちにあり）々ニアロウス太子天子ハ在外（そとにあり）（杜詩続翠抄十三）
・秦ノ国ノ宝トモ云ワウス良臣ヲ殺シテ…（史記抄　秦本紀）
・ナニカ庶民ナトカ同ヤウニアタラウス風テハナイ（玉塵抄三）

鎌倉1993の主張するところは、日本語を母語とする筆者の言語感覚にとって受け入れ難い点が多い。このような評言は、個人の言語感覚という曖昧なものを持ち出し、一見非学問的な非難に見えるかもしれない。また、従来の解釈に泥んで新しい考え方に拒否反応を示すことは筆者自身も自らに戒めるところである。しかし、ある解釈なり予想なりが当該言語にとって自然なものであるかどうかは大切なことだと思われる。ウズやウズルの頻出する中世の文献を、鎌倉1993の主張を前提に読んでみるとその解釈の不自然さは筆者以外の多くの人にも実感されるのではないだろうか。《終助詞ズ》や《推量の助動詞ムに直接する動詞》や《四段活用の動詞スル》など日本語の歴史を通じて他に例を見ない事象がウズ・ウズルのみにこれだけ集中する解釈というのはやはり無理としか思われない。

ムズルを～ムトスの「と文字を失」ったものとする清少納言の言語感覚を素直に解釈する限り、少なくともムズルと～ムトスを鎌倉1993のように全く違う出自の語だと清少納言は考えていないととるのが素直な解釈であろう。この『枕草子』の記事に関する鎌倉1993の見解は従い難い。

室町末のロドリゲス『日本大文典』においても、次に掲げる文言のように、

○未来の三つの形，Agueô（上げう），Agueôzu（上げうず），Agueôzuru（上げうずる）は話しことばにだけ使はれるものであるが，…（第一巻　未来に就いて　＊土井忠生訳本による）

ウ・ウズ・ウズルを未来を表す形式として一貫して同類として扱っており、ウズのズを終助詞ゾと結びつけて記述するような箇所はない。ロドリゲスはポルトガル人ではあるが、室町末の日本人の言語感覚としてもウズとウズルを全く別な語構成ととることがなかったものと考えられるのではないだろうか。

以上の基本的理由から筆者は鎌倉1993の主張に同意できない。しかし、鎌倉1993の提起した問題として有意義なことと考えるのは、ウズのズが終助詞に近い意味合いを持っているという直観的判断である。これは、ムトスから生まれたムズが、当初は活用形態としても意味としてもサ変活用としての性質を持ちながら、これが中世後半に活用語尾ルを失ったウズに変わることによって、無変化助動詞化し、その分終助詞に近付いたその姿を捉えているものと考えるのである。この点についての筆者の考えを次節以下に述べる。

第７節　ウズ形の成立－ル音脱落

山内1964は、抄物資料に見られる連体法のウズを

〈連体法の〉ウズルから直接生まれたもの、即ちウズルのルが脱落することによって成立したもの

と見る仮説を提出している。助動詞タリ・ナリ、形容動詞～ナリが、タ・ナ・～ナとなる傾向と同じ変化としてウズル＞ウズのル音脱落を想定するのである。

筆者も山内1964と同様に、抄物資料などの終止連体形ウズをル音脱落の結果生じたものと見たい。前節で述べたように、筆者は、終止連体形ウズを、伏流した音声言語の終止連体形ムズルの後身と考える。ムがウに変化するとともに活用語尾のルも失われたのである。

ただし、このムズル＞ウズのル音脱落が、助動詞タリ・ナリ、形容動詞～ナリのル音脱落と全く同じものかどうかは、疑問に感じざるを得ない。その理由は、山内1964が反論の可能性として指摘しているような、ウズ（ル）が本来サ変であるのに対し、助動詞タリ・ナリ、形容動詞～ナリがラ変であるというようなことではない。そうではなく、問題は、助動詞タリ・ナリ、形容動詞～ナリがなぜル音脱落を起こしたかという解釈に関わる。

まず、形容動詞～ナリについて、なぜ、その連体形ナルがル音脱落を起こしたかについて小松1999は、

> シヅカナルのルが脱落し－あるいは、ルを脱落させて－、副詞シヅカニとのセットとして機能する連体詞シヅカナに変身した（同書p263）

という見解を示している。ル音脱落の目的が副詞との形態的セットを形成するためのものであったとするこの考えは、筆者にとって魅力的である。

小松1999の当該部分の論の主旨は、いわゆる形容動詞を品詞として設定することへの反論であるから、以下に述べる筆者の考えは、発想として小松1999に沿うものであっても、小松1999とは別な意見になるであろう。筆者は、一群のル音脱落を連用形と連体形（終止連体形）との形態的セットの形成として考えたい。即ち、ル音脱落を起こす語群には、次のようなセットが考えられる。

指定の助動詞及び形容動詞ナリのル音脱落は、

連用形　ニ　⇔　連体形　ナ

指定の助動詞及び形容動詞活用語尾として用いられるヂャ〈ダ〉もデアル＞デア＞ヂャ〈ダ〉のル音脱落の結果生まれたものと考えられているが、これも、

連用形　デ　⇔　終止連体形　ヂャ〈ダ〉

のセットの形成と考えられる。

上の二つのセットは、ニ⇔ナのセットが主に《連用修飾（副詞法）⇔連体修飾》の対として生まれ、デ⇔ヂャ〈ダ〉のセットが主に《接続（連用中止法）⇔断止（終止法）》の対として生まれた。[注7]

過去の助動詞タを生んだル音脱落は、いわゆる接続助詞のテとのセットを形成したものではないかと思われる。接続助詞として扱われるテは、通常、助動詞タ（リ）の活用形の中に入れられはしないが、近代語における動詞の活用による語形変化系列（paradigm）の中で、次のような動詞表現における接続形語尾と過去形語尾の対（日本語教育などで言うところのテ形と夕形）を形成したものと解釈できる。

＊連用形（接続形）　書いテ　⇔　＊終止連体形（過去形）　書いタ

有っテ　　有っタ
見テ　　見タ
…　　…

つまり、ル音脱落を起こすこれらの語群には、形態的なセット(注3)としてル音脱落を促す形態がまず存在していたことが条件となっていたと考えられるのである。ウズ（ル）はこれらに対してルの脱落を促すような形態を他に持っていない。なお、このような、活用語における各活用形の形態変化に関する問題は第12章で詳しく論ずる。

もちろん、ウズ（ル）以外にも、セットとなる形態を持たないのに（少なくとも外見上）ル音脱落を起こした語もないわけではない。ナ変動詞と助動詞ケリの後身と考えられるケである。

しかし、ナ変動詞は、連体形死ヌルのルが脱落したというよりも、活用の型がナ変と五段との間で揺れた結果、五段活用の方に吸収されたということであり、それには終止連体形そのものの問題よりも、連用形における音便形の発生が五段活用への傾斜を促進するに力が大きかったものと考えられる。

助動詞ケリが中世において力を失い、タケルという複合した形で命脈を保つのは、抄物資料で見られるとおりであるが、これが現代のような（タ）ッケの形になる経緯はあまりはっきりしていない。しかし、ここにおける本来の活用語尾ルの脱落は、ケルのさらなる語形縮約による終助詞化と考えられる。してみると、ムズル＞ウズのル音脱落の場合は、終助詞として連体形としての指標であるルを不要とした（タ）ッケとは異なり、まだ連体法を持っていたわけであるから、このタケル＞（タ）ッケとは別な変化と考えざるを得ない。しかし、実際ルを失ったウズのズは、特に終止法の場合終助詞的な働きを当時の言語主体にも感じさせるようになっていったのではないだろうか。

筆者は、語尾ルを失ったウズ形の成立について、根本的な動因として辞化（助動詞化）による語形縮約の動きを考えるのであるが、この語形縮約は語源となった形式から離れようとする動きでもある。山内1964に示唆されている考えであるが、語源としてあったサ変動詞スが終止形連体形合流の結果スルとなり、その形が定着するに応じて、助動詞のウズルは、サ変との手切れをより明確にする形（つまり語尾のルを脱落させる形）で語形を縮約させたのではないだろうか。

第８節　ウズル形の成立－活用語尾ルの再生

これまで論じたように、室町時代抄物資料の終止法ウズ・連体法ウズは、どちらも本来の終止形（旧終止形）の残存ではなく、直接的には音声言語における終止連体形ムズルのルを脱落させた後身と見たい。そうしてみると、残る問題は、抄物資料の後の時代の資料で再び連体法と終止法の一部にウズルの形が復活していることである。室町中期の抄物資料で終止法・連体法ともにウズが優勢であったものが、室町後期のキリシタン資料では、

終止法でウズ・ウズル両形が見られ、連体法でウズルが優勢となる事実（江戸時代初期までに成立する狂言資料でもこの基本的な分布はキリシタン資料と変わらない）はどう解釈すべきか？

筆者は、終止法・連体法ともにウズという同一の語形をとることによって、ウズはウズなりに終止形連体形合流という活用語全般にわたる歴史的流れを成就していると考える。

まず、語尾ルを失った終止連体形ウズの形が語形縮約の指向及び語源のサ変動詞からの離脱として成立したが、これに反動として、活用形の指標としての活用語尾保存の欲求が働いた。そしてウズの場合、この二つの力が時間的な段階を置いて語形上に現れたのである。反動の結果ウズルの形になったのには次の二つの理由が考えられる。

その理由の第一は、ウズの第一拍のウが、それが接続する活用語の語末母音と融合して長音化し、

〔四段・ナ変・ラ変・形容詞型活用語に接続する場合〕

－ａ＋ｕｚｕ＞－ａｕｚｕ＞－ɔ：ｚｕ

〔上二段・上一段型活用語に接続する場合〕

－ｉ＋ｕｚｕ＞－ｉｕｚｕ＞－ｙｕ：ｚｕ

〔下二段・下一段・サ変型活用語に接続する場合〕

－ｅ＋ｕｚｕ＞－ｅｕｚｕ＞－ｙｏ：ｚｕ

〔カ変に接続する場合〕

－ｏ＋ｕｚｕ＞－ｏｕｚｕ＞－ｏ：ｚｕ

となるに従って、二拍助動詞としての語形があいまいになってきたのである。ム＞ン＞ウの変化は、要するに意志・推量の助動詞ムの歴史的変化であり、ムズの第一拍の変化はこれと同じものであるが、いわゆる助動詞ウ（と学校口語文法で呼ばれるもの）は、実際のところ全く長音拍（その表記はウで統一されるにしても、その音色は【ɔ：】【ｕ：】【ｏ：】と様々である）にまで自らの姿を薄れさせ、いわば活用語の活用語尾の一形と化し去るに至ったものであった。したがって助動詞ウズも助動詞とそれが接続する活用語語尾との境界があいまいとなった。例を挙げて説明すると、ムズの形である限り

書かむず　ｋａｋａ＝ｍｕｚｕ（動詞未然形＝助動詞）

と、動詞と助動詞の境界は明確であり、助動詞としての語形も明確である。これがウズになると、

書かうず　ｋａｋａ＝ｕｚｕ　＞　ｋａｋɔ：ｚｕ

となり、動詞と助動詞の境界が次のように解釈され得る形となった。

ｋａｋɔ：＋ｚｕ（動詞意志・推量形＋ズ）

この結果、ズは長音拍活用語尾に接続する終助詞的な立場に追い込まれそうになったのである。これに対して特に連体法の場合に活用語尾保存の反動が起こり、（ウ）ズルという語形を成立させることとなったのである。

ウズがウズルになった理由の第二は、サ変からの手切れとしてウズを生んだ後も、並行

する～ウトスルの言語形式との意味上の連関を完全には断ち切れず、書記言語における旧来のムズルの形も依然として生命力を持っており、類推からウズルの語形が生まれる可能性を完全に駆逐してはいなかったのである。しかも、已然形はウズレで一貫しており、活用の語形変化系列（paradigm）としては、この面からも再活用化に際して《靡かびき》のルが付加される形をとるのが自然であったのである（第11章参照）。

語形としてウズルという旧連体形の形が復活したとしても、旧サ行変格活用という文法が全面的に復活したわけではない。付加されたルは、体言に接続するための語尾であり、一種の延言であった。したがってウズルは一種の荘重体として終止法にも用いられ、ウズとの微妙な意味の違いによる住み分けを生じたのである。

第９節　本章のまとめ

最後に本章の考え方を簡略な箇条書きと図表にまとめて示す。

①書記言語に残る形に対し、それぞれの時代における音声言語の形を推測した。

②平安時代から室町時代前期にかけての終止形ムズは規範化された書記言語の形で、音声言語では当初から連体終止形ム〈ン〉ズルが使われていた。

③音声言語においては、ム〈ン〉ズルがウズルに変わるとともに一旦ル音を脱落させたが、室町時代末に再び活用語尾のルが復活した。

	《音声言語》	《書記言語》
平安時代	～ムトスからムズルが生まれ、当初から終止連体形ムズルの形で使われる	語源のサ変動詞の終止形にならって終止法では規範化された終止形ムズが使われる
鎌倉時代～室町前期	ムズル＞ンズル＞ウズルへの移行期	終止形ムズ～ンズ〔ナム〈ン〉ズ・ム〈ン〉ズラム〈ン〉に偏る〕 連体形ムズル～ンズル
室町中期	終止連体形ウズルのル音脱落 →終止連体形ウズが使われる	《口語的文献》では前代の書記言語の形に代わって音声言語とほぼ同一の形が使われる 《文語的文献》では前代の書記言語の形が基本的に使われるが、音声言語のウズ・ウズルを機械的にンズ・ンズルに直した用法も見える〔複合助動詞以外の形や終止法のンズル等〕
室町後期	活用語尾ルの復活 →終止形ウズ～ウズル 連体形ウズル	

本章は、文献資料の時代順に従って、それぞれの文献上に見られるム（ウ）ズ（ル）の諸形を時代順に継起した形態として解釈しようとしたものである。その点では《素直な》解釈を目指したものと言えるだろうが、平安時代から鎌倉時代にかけて文献資料の背後にあって《見えない》音声言語での変化を想定しているところが問題とはなるだろう。

また、本当はもっと検討を加えるべき問題も残っていて、それは次のような、

・鳥ノ死ントスル時ハ、哀テ鳴ハカリ也。人ノ死ナンスル時ハサハナシ。（応永二十七年本論語抄　泰伯第八）

・人之尋テ御入アランス処ニアラス（杜詩続翠抄　八）

抄物資料に見られるンズ（ル）の類をどう位置付けるかという問題である。『応永二十七年本論語抄』の例は前代の書記言語に見られる用法と変わりないが、『杜詩続翠抄』の例は前代の書記言語には見られない連体法のンズである。これをンズがウズになる前にル音の脱落が起こっていた証拠と見るか、音声言語におけるウズの用法をそのままにウをムに変えただけで書記言語化したものと見るか問題である〔筆者は後者の見解をとりたい〕。しかし、この問題は、一つ一つの抄物資料の文体をどう見るかという問題でもあり、個別具体的な検討が必要である。本研究では論じきれないので課題として残したい。

〈第９章・注〉

（１）ここに挙げた例の中にはその起源ないし形態変化について異論の存するものもあるが、たとえそれらの例を除いたとしても本稿での主旨に影響はないものと考え、異説を一々吟味することは省略する。図示した形態変化は概略的であり精密なものではない。

（２）筆者の考え方は、小松1999の言う「磨り減らしによる助動詞化」の考えに極めて近い。同書p217～p223（日本語の方略Ｉ）を参照されたい。

（３）用例の数値についてそれぞれの論文から引用させていただく。

○漆谷1995より

	愚管抄	宇治拾遺物語	十訓抄	古今著聞集	とはずがたり	歌論・能楽論	保元物語	平治物語	源平盛衰記	太平記	義経記	計
終止形ムズ全体	25	32	12	17	3	5	27	20	94	80	41	356
ムズラム	16	24	9	14	3	5	22	17	84	80	34	306
ナムズ	9	7	3	2			4		7		3	35

○菅原1991より（『延慶本平家物語』の終止形ムズ諸形の用例数）

ムズ	ナムズ	テムズ	ナムズラム	テムズラム	ムズラム	計
4	44	5	1	2	148	203

（4）『諸事表白』では、この他にも過去推量の助動詞ケムがケウという珍しい形で現れると言う。

（5）ツラウやナリト（モ）のような他の助詞助動詞と複合転成したものは除く。

（6）鎌倉1993では、連体法のウズを無視しているわけではなく、助詞ゾも体言に続く例もあるから、この点でもウズと～ウゾは同じとしている。しかし、～ウゾの連体法として挙げられている例は「～ウゾヂャホドニ」「～ウゾナレドモ」のような例で、確実に連体修飾する例を示していない。なお、本稿で挙げているウズの例は文意上確実に連体修飾しているものであり、終止法の例とは解釈できないものであることを付け加えておく。

（7）指定の助動詞と形容動詞の諸形態の消長については第12章及び坪井1981を参照されたい。

（8）小松1999を出発点としたために本稿でも《セットの形成》という言い方をしたが、歴史的変遷の有り様としては、これらの諸例いずれも、連用形が終止形連体形の合流で動揺する連体形を誘導して新たな形態を作り出させたものと筆者は考える。このことについては第12章で論ずる。

〈第９章・参照文献〉

漆谷1995　漆谷広樹「中古・中世におけるムズラムについて－終止形ムズの用法－」『専修国文』56号 平成７年１月

大塚1956　大塚光信「ウズとウズル」『国語国文』第25巻９号 昭和31年９月

大塚1966　大塚光信「抄物とその助動詞三つ」『国語国文』第35巻５号 昭和41年５月

鎌倉1993　鎌倉暄子「いわゆる推量の助動詞ムズ・ムズルとムトス－その本質と成立に関連して－」『鶴久教授退官記念国語学論集』桜楓社 平成５年５月

京1995　京健治「「ウズ」「ウズル」」『国語国文』第64巻２号 平成７年２月

小松1999　小松英雄『日本語はなぜ変化するか〔母語としての日本語の歴史〕』笠間書院 平成11年１月

菅原1991　菅原範夫「延慶本平家物語の「ムズ」小考」『鎌倉時代語研究』14 平成３年10月

坪井1981　坪井美樹「形容動詞活用語尾と断定の助動詞－歴史的変遷過程における相違の考察－」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 昭和56年７月

坪井1986　坪井美樹「助動詞の語形変化と活用形－中世後期を中心として－」『日本語と日本文学』第６号 昭和61年11月

山内1964　山内洋一郎「助動詞「うず」について－連体形終止の異例として－」『広島大学文学部紀要』第23巻３号 昭和39年８月（山内1989に再録）

山内1989　山内洋一郎『中世語論考』清文堂 平成元年６月

山内1997　山内洋一郎「助動詞「うず」の終止・連体形について－中世における終止形の残存－」広島文教女子大学『文教国文学』第37号 平成９年

吉田1962a　吉田金彦「中古・近古における推量語「むず」・「むとす」の用法」『国語と国文学』第39巻３号 昭和37年３月

吉田1962b　吉田金彦「「むず」（んず）の成立」『国語国文』第31巻８号 昭和37年８月